

町長室から

田上町長
佐野 恒雄

七月七日の七夕は、織り姫とひこ星が天の川を渡り、一年に一度だけ会えるといわれる日です。短冊に書いた願い事が叶うという言い伝えがあります。

昔、新潟県の農村部に住んでいたおばあちゃんは、七夕になると、毎年、過去を思い出して後悔するそうです。

おばあちゃんの村には、七夕に、子どもたちが、朝早く起きて田んぼの稲の葉に乗る露を集め、それで墨をすって短冊に書く習わしがありました。おばあちゃんも、子どもの時は毎年、朝早く田んぼに行き、露を集めて「お米がたくさん採れますように」と書きました。毎年、野菜もお米もたくさん採れました。ところが、五年生の時、朝早く起きるのがおっくうになり、井戸の水で墨をすって書きました。すると、この年は、お米の収穫がよくありませんでした。父や母が困る姿を見て、自分をごまかしたせいだと思つて小さな胸を痛めたのです。お星様が空から見ているのだと思つたのです。

昔から、子どもに「悪い事をしてはいけないよ。お天道様が見てるよ」と教えることがあります。この言葉は「悪い事をするのをとがめる」という意味だけではありません。「誰が見ていなくても、自分の良心に恥ないように、堂々と生きなさい」、「誰も分かつてくれなくても、お天道様が分かっているよ」という励ましの意味もあります。

幕末から明治維新に活躍した西郷隆盛が、「人を相手にせず、天を相手にせよ」と言っています。人の評価など気にしないで、もっと大きなこと、自分の志に従つて行動しなさい、と言っているのです。そういう生き方をしたいものです。

今年の七夕は「早くコロナ禍が収まりますように」と願いました。